千葉県子どもの読書活動推進計画（第四次）（案）に関する意見募集結果

※とりまとめ上、趣旨を損なわない範囲で意見を要約しています。　　一般県民　６人　２１件

番号	章	意見内容	意見に対する県の考え方
1	第２章	自分が小学生のときは本を読む機会が多かった。中学校、高校と進学するにつれて、学習に費やす時間が多くなり、読書をしなくなった経験がある。確かに、受験のことがあって勉強が優先になるが、中学校や高校でも読書の時間が確保してあれば不読率は減っていくのかもしれない。小説等は読めば次の展開が気になるからまた読もうと思うようになる。いろいろな分野の本があるが、読めば読むほど自分がかしこくなっていくことに気付く。学校で読書ができる環境づくり、機会づくり、何より授業での活用、それらのことを意図的に仕掛ければ、すぐに効果は表れなくても自然と本が好きな子どもが増えると考える。	５年前に比べ、本を読まない中学生、高校生が増えている現状があります。御意見のとおり、学校等において子どもが本に触れる機会を意図的につくることが大切だと考えます。初めは本を読むことに抵抗があっても、継続することで本の魅力を感じる中学生、高校生が増えるものと考えます。今後も本好きな子どもが増えるよう、読書活動を推進してまいります。
2	第２章	評価指標「読書の好きな子どもの割合」に関して、中３、高３、共に４ポイント以上減少していることについて掲載されているが、もっと丁寧に掘り下げた分析が必要ではないか。せっかく千葉県が子どもの読書活動推進計画を挙げているのに中学、高校でポイントが減少してきていることについて深刻に受け止めるべきではないか。確かにスマートフォンの普及、塾通い等の影響は挙げられるが、こうした社会状況の変化の中で、子どもたちにとって本との出会い、読書の魅力が伝えきれていない現状があるのではないか。その根底に、学校や地域における読書環境が不十分なこと、特に図書館整備費が各自治体の予算で充当されていないこと、また学校司書の配置が進んでいないこと等が挙げられるのではないか。また、学校図書館を活用した学習が学校全体の取組として不十分なのではないか。	分析結果の記述について検討を進めてまいります。「読書の好きな子どもの割合」が減っているのには、様々な要因があります。読書環境の整備については、地域によって大きな差がある現状です。読書の魅力や大切さが注目されている今、計画で挙げているような取組や環境整備を地域の実態に応じて確実に実施することが重要と考えます。
3	第２章	評価指数「不読率の割合」について、「進学するにつれて増えています。」とあるが、なぜなのか分析がない。実際には、多くの本を読む生徒と全く本を読まない生徒の二極分化が進んでいるのではないかという分析もある。本に触れる機会がない子どもについてどのような手立てがあるのか。基本計画には様々な「取組」が挙げられてきたが、残念ながら「効果」は薄いと言わざるを得ない。「取組」自体の問題なのか、「取組」の進め方の問題なのか、あるいは図書環境の問題なのか。実際には、子どもの家庭環境、子どもを取り巻く文化、社会状況の変化、学校教育の「難しさ」等、深く掘り下げて考える必要があるのではないか。こうした点について、第２章「子どもの読書活動に関する状況」で記述されるべきではないか。	御指摘のとおり、分析結果について記載します。本に触れる機会がない子どもに対しての手立てについては、様々な取組を推進計画では紹介します。これらの取組が家庭・地域・学校等の実態に応じて実施されることを期待します。そのためにも、市町村の読書活動推進計画が大切になります。全県的に子どもの読書活動を推進するために、まずは県行政と市町村行政が連携を図り、読書活動の土台をつくることが大切だと考えます。
4	第２章	数値目標「不読率の割合」の中で「朝の一斉読書」が取り上げられているが、不読率が進学するにつれて増えている背景に、この「朝の一斉読書」の弊害が出ているのではないか。生活指導的な「効果」は喧伝されているところだが、結果として「読書離れ」の一因となっているのではないか。慎重かつ丁寧な検証、分析を望む。	朝に限らず全員が読書をする機会を学校全体で位置付けることで、子ども全員が本に触れることができます。自主的、自発的な読書活動につながるきっかけとしても有効だという面もあります。学校ごとに実態は異なるので、各校に応じた取組を推進することが大切と考えます。

千葉県子どもの読書活動推進計画（第四次）（案）に関する意見募集結果

※とりまとめ上、趣旨を損なわない範囲で意見を要約しています。　　一般県民　６人　２１件

5	第２章	数値目標「学校図書館図書標準を達成している学校の割合」について、小学校の目標を超えたことは触れてあるが、中学校が目標を達成できていないのはなぜか。原因について触れるべきである。第三次計画時には、地方財政措置で講じられている学校図書館図書の経費を図書購入費に適切に充当するよう、市町村に働きかけていく（県の考え方）だったが、なぜ進まないのか。市町村の理解不足では済まない問題と考える。県からの働きかけを強める必要があるのではないか。	御指摘のとおり、中学校が目標を達成できていない原因について記載します。原因の一つに人的配置が十分に進まないことが考えられます。学校司書、司書教諭の配置は学校図書館の環境整備において重要な役割を担っています。一方、学校長（学校図書館長）のリーダーシップのもと、魅力ある学校図書館づくりを進めている学校は増えていますので、さらに全県的に広がるよう様々な会議や研修等を通じて働きかけていきます。
6	第２章	最近、新聞等でＰＩＳＡの結果を受けて、読解力の低下に大騒ぎである。一言で、読解力と言っても、いろいろな解釈があると思うが、やはり、読み書きを含め、その根底となる活動は読書ではないだろうか。簡便なスマホの利用も全部を否定するつもりはないが、やはり、実際に本を手に取っての読書から得られるものは大きいと思う。私は読解力を身に付けるためには、なんと言っても読書量だと考える。千葉県が進めていこうとされている政策を大きく支持したい。	御意見のとおり、読解力向上の根底にあるのは読書と捉えています。読解力には、小説や物語の登場人物の行動や心情の変化とその理由を読み解く力や、説明文から文章を要点を読み取る力等があるとも言われています。これらの力を高めるためには、読書量が大切であり、そのためにも読書の習慣を身に付けることが大切であると考えます。
7	第３章	第四次では「読書県ちば」を強烈にアピールして、それを千葉県の文化振興策にするのがよいと思います。第四次計画で実施する活動にはすべて「読書県ちば」を冠につけるとよいと思います。その展開で千葉県は読書面で全国制覇できます。	「読書県『ちば』」をアピールしていきたいと考えます。現在、第３期千葉県教育振興基本計画を作成中であり、この県の教育に関する計画に合わせて「読書県『ちば』」を推進していきます。
8	第３章	「第四次推進計画のイメージ」で「家庭・地域・学校」の連携図が描かれていますが、そこに「行政」が入らないのか。特に市町村は「行政」が読書政策の核になるものです。「行政」の立場を明確にしない限り、活動の具体性と責任部署があいまいになってしまいます。この計画は県が市町村行政に示す方針ですから、そこは明確にすべきではないか。	御意見のとおり、連携図に「行政」を加えます。まず、県行政と市町村行政が連携を図り、子どもの読書活動を推進できるよう体制づくりに努めます。
9	第３章	今回の推進計画策定を機に、ぜひ「読書県ちば」を内外にアドバルーンをあげて、他県とは違う読書政策を打ち出してほしい。	国の基本計画に基づいて県の推進計画を策定しますが、第四次計画では県独自の取組についても推進していきます。
10	第３章	基本理念の説明について、「本の楽しさや必要性」を「本の楽しさや魅力」あるいは、「本の楽しさや読書の大切さ」に変えていただけないか。「必要性」は堅い表現であり、基本理念の趣旨にふさわしくないので、柔らかな言葉がよいと考える。	御指摘のとおり、基本理念の趣旨を踏まえ、記述内容を検討いたします。
11	第３章	基本理念の説明について、「その人々がもっている知識・情報・技能・思い・人間性等」の人間性は削除した方がよい。人間性という内容はこの内容にふさわしくないと考える。	御指摘のとおり、基本理念の趣旨を踏まえ、記述内容を検討いたします。
12	第４章	公立図書館の取組例が具体的に記載されており、とても参考になる。もっと連携を図っていきたい。学校図書館自己評価表についても、もう少しくわしく記載してあるとよいと感じる。計画の性格である「全県的に推進するための手引き」の観点からも、わかりやすく整理されていると感じる。	読書活動に関わる方々がこの計画の具体的な取組を参考にし、すべての子どもが読書に親しみながら成長できることを願っています。学校図書館自己評価表については、評価項目について補足資料編に記載します。

千葉県子どもの読書活動推進計画（第四次）（案）に関する意見募集結果

※とりまとめ上、趣旨を損なわない範囲で意見を要約しています。　　一般県民　６人　２１件

13	第４章	「朝の読書」は千葉県発の読書運動である。これは全国の学校と教育行政を動かした。この運動の発祥県であることも「読書県ちば」アピールに重要なことだと思う。	船橋市の高校が全国で初の「朝の読書」をはじめ、今では全国に広がっています。各学校の実態に応じて柔軟に実施し、さらに充実した取組になるよう、研修会や会議を通じて普及していきたいと考えます。
14	第４章	第四次を県民運動の指針と推進をするために、ぜひ「おすすめ本１００選」のバージョンアップをお願いしたい。「読書県ちば」で全国を震撼させたい。	「おすすめ本１００選」については、令和２年度から５か年の間で、刷新する予定です。おすすめ本を紹介し、魅力ある本に触れ、読書の機会が増えることを期待します。
15	第４章	「子ども司書（ジュニア司書）」の奨励はよい。ただ、この項目名称だけでは、何のことかわからないと思う。八街市立図書館の「ジュニア司書」活動は全国のモデルケースになっているので、八街の事例を説明して、この制度が子どもたちにどのような成長成果を生み出しているかも説き明かしていただきたい。	「八街市ジュニア司書制度概要」について、研修会や会議において紹介していきたいと考えます。
16	第４章	「学校等における発達段階に応じた取組の推進」を「学校等における成長の段階に応じた取組の推進」に変えていただけないか。「発達段階」は定式的、一元的なとらえ方となり、第４章－１「読書への関心を高める」趣旨にふさわしくないと考える。「成長の段階」とすれば、緩やかな流れのニュアンスでよいと考える。	文部科学省が作成した第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の計画改正の主なポイントとして「発達段階ごとの効果的な取組を推進」とあります。「成長の段階」というニュアンスはとてもよいと感じますが、この県の推進計画でも国の基本計画に基づき「発達段階」と記載させていただきます。
17	第４章	全校一斉の読書活動「朝の読書」、「読書週間」等、読書機会の設定、の「一斉」と「朝の読書」は削除した方がよい。「朝の読書」については、強制的な取組は読書に親しむ趣旨に反する、その反動で読書離れにつながる等の問題点が指摘される。また、「一斉」という表現は、本に親しみながら成長していくための読書活動という基本理念にふさわしくないと考える。	「朝の読書」については、本に触れる機会のひとつと捉えており、その取組が充実している学校も多くあります。その反動もあるかもしれませんが、「朝の読書」でしか本を読まない子どももいますので変更なしとさせていただきます。「一斉」という表現は御意見を参考にし、検討してまいります。
18	第４章	「本に親しみながら本を学ぶ」日頃から大切にしていきたい。毎朝の読書の時間に加え、上級生が下級生に読み聞かせをするペア読書、職員による読み聞かせ、図書ボランティアによる読み聞かせや趣向を凝らした読書集会等の企画、調べ学習など、本に親しむ機会を多く取り入れています。今後も家庭・地域等の協力を得ながら本に親しみ本から学ぶ子どもを育てていきたい。	「学校等における発達段階に応じた取組の推進」の中で様々な交流による読み聞かせの紹介があります。交流の仕方は工夫によっていくつも考えられるので、今後も引き続き、効果的な読み聞かせを実施していたただきたいと考えます。

千葉県子どもの読書活動推進計画（第四次）（案）に関する意見募集結果

※とりまとめ上、趣旨を損なわない範囲で意見を要約しています。　一般県民　６人　２１件

19	第４章	子育て期間中は努めて読み聞かせをしていた。情緒の涵養や想像力を育むためといった、とても高いものをめざしたわけではないが、本好きの優しい子に育ってくれた。あの日々は、子育てをしている私自身にとっても楽しい時間であった。現在ではさまざまな場所で、子育て中の親子が読み聞かせを聞かせてもらえると聞いている。とてもすばらしいと思う。今回の計画にも地域における発達段階に応じた取組の推進ということで、さまざまなものが紹介されていた。母親であっても働いている者がますます多くなっている昨今、このようなものが広がっていくことはすばらしいと思う。同時に、このようなすばらしい取組の数々の情報が、簡単に手に入れられるようになってくるとよいと思う。	親から子どもへの読み聞かせは、子どもの情緒と言語の発達を促すほか、親子の触れ合いを通じて家族の絆が深まります。家族で一緒に本を楽しむことが大切だと考えます。子どもの読書への関心を高める具体的な取組例を多く掲載した推進計画にしたいと考えます。県教育委員会としましても、今後も様々な機会を通じて情報発信に努めてまいります。
20	計画全体	乳幼児期の息子が２人いる。県の読書活動の推進のおかげで、本に触れる機会（検診等）が多くあり、子どもたちの本に対する興味関心を高めることや心を豊かにする機会になっており、感謝している。市から本をいただくこともあったと妻から聞いた。本が生活の一部になるように家庭でも努力している。各家庭で不要になった絵本などをいただける場所が増えるとよいと思う。読書活動の推進から子どもの教育を行う県の取組を全面的に応援する。	ブックスタート事業については、市町村ごとに工夫して実施しています。地域のニーズに応えられるよう、家庭・地域・学校等・行政が連携し、すべての子が本に親しみながら成長できる「読書県『ちば』」を目指します。
21	計画全体	全体的な内容・構想・構成、見事なほどによく整理された推進計画だと思う。この県の推進計画が市町村の方向性にもなるので、市町村がこの推進計画をどのようにとらえられるのか、大いに期待したい。読書推進を地域ぐるみ、全社会運動に機能させるに一番重要なキーワードは「コミュニケーションネットワーク」をどう構築するかにあると思う。それぞれ有効な活動があっても、それらがネットワークでつながらないと継続発展にならない。県や市町村の担当者が替わってもネットワーク（組織）があれば後任者で継続できると考える。また、市町村において専門的な「読書推進委員の育成」も大事なことである。この「ネットワーク構築」と「読書推進者養成」が基盤になると思っている。	今後も子どもと本をつなぐ・子どもの本でつながる読書活動を推進します。来年度から、より地域に密着した県主催の研修会を実施したいと考えています。「読書環境の整備と連携体制の構築」の具体的な取組において、連携体制の構築、研修会等について記載しています。御意見のとおり、ネットワーク（つながり）を大切にし、組織的、継続的に読書活動を推進していきます。